

大会に初めて参加して

北海道農業試験場 細山隆夫

村落研究学会大会が北海道で開催されることを知り、参加する意志をもった。これまでは村研年報の諸論文を拝読しながら勉強させて頂いたものの、学会大会に参加しようとの動機づけはなかなか起こらなかった。なぜなら村落研究学会とは、とても私のような若輩者が参加できるところではないと感じていたからである。しかしこの度は地元大会でもあり、この機会を逃してはならないと考え、思い切って参加させて頂いたしだいである。

まず新参者としての正直な感想を述べさせて頂く。まず何よりも村落を研究対象とする研究者が大勢集結しているという状況そのものに圧倒された。普段私は農業経営の研究者集団の一員であり、いわゆる村落社会を専門分野とする研究者との交流は少なかった。従って今回大勢の諸先生方を間近にみて、最初はただただ驚きと緊張の連続であった。

初日の研究報告を拝聴して、以下3つの印象を持った。まず第1に海外に関する報告の多いことに驚き、国際性の豊かな学会ということを感じた。韓国の長男の地位に関する研究、タイにおける農村の兼業化進行と社会変化、イギリスの親族構造に関する社会史的考察など海外研究は興味深く拝聴した。またWang, In Keun氏による韓国農村社会学の報告で、普段知ることのない隣国の研究の歴史と展望状況について多くを教えられた。

第2に村落研究の対象が多岐に渡り、かつ村落が直面する現実の諸問題に関する研究報告が多かったことである。普段村落というと農村しか頭に浮かばない私にとって、漁業村落を対象とした地域社会の再編に関する報告は新鮮であった。そして農村の環境整備問題や、近年クローズアップされる中山間地域問題に対する最新の分析報告がなされ、現在の農業農村の振興方策についての問題意識の在り方を勉強させて頂いた。

第3に日本国内の報告に限ってもその研究対象地域は広く、国内村落の性格の多様性を感じた。北は北海道から長野、埼玉、鹿児島といたる地域を対象とした研究報告があった。北海道しか知らない私にとって、各地域の具体的な実証分析は都府県諸農村の勉強になったとともに、村落研究学会構成員の地域的広がりを感じさせた。

二日目には「村研40年—これからの課題」と題して、様々な研究分野から報告が行われた。ここではこれまでの村落研究の在り方、および新しい研究方向と展望について多くを教えられた。まず相川氏はこれまでの日本農村社会研究の方法と対象を工藤、満田のシステム論まで理論的にトレースされ、村落研究の歴史的流れについて再認識させられた。

最後に印象に残ったのは社会学と経済学の双方が、村落と家族農業経営を分析する際、その分析単位を個人レベルにシフトさせようとしていることである。徳野氏は農村社会の実態把握のためには、研究分析の単位を家等集団的なものから、個人レベルに置く研究方法が必要と主張されている。また経済学の立場から庄司氏は家族経営という経営形態を論ずるとき、今後は農業従事者、個人としての女性の地位再構築が重要と強調された。

このような新しい課題と研究方法に取り組み始めた、記念すべき第41回村研学会に参加できたことを光栄に感じたしだいである。

最後に北海道での開催を準備して下さった大会事務局の皆様、本当にご苦労さまでした。

